

## 【提言】学校再開に向けた、いまだかつてないとりくみを

# いまだかつてない事態には、いまだかつてないとりくみを

—子どもたちにとって大事なことを絞り込んで、教育内容の大胆な削減を—



大阪教育文化センター事務局 2020年4月27日更新 4月29日更新

## §0. はじめに

新型コロナウイルスにかかわる休校期間は、きわめて長期にわたるものであり、子どもたちも、父母・保護者のみなさんも、先生方も、いまだかつて経験したことのない事態となっています。いつ学校が再開できるのだろうか、という不安とともに、学校再開後の教育活動はどうなるのだろうかという心配もあります。

子どもにとって何が必要か

このような、いまだかつて経験したことのない事態に対して求められる教育活動は、従来の枠組みにとらわれては、対応できません。従来の枠組みを超えた「いまだかつてないとりくみ」が必要です。その際、もっとも大事なことは、子どもにとって何が必要かであり、そのことを中心に据えてとりくむことが何としても求められると考えます。

### 学習指導要領に子どもを合わせない

そのためには、新学習指導要領にとられるのではなく、子どものための教育課程づくりこそが重要です。マスコミ報道では、もう今から「夏休みをなくす」と言っている自治体の長も生まれてきているようですが、とんでもないことです。そんなことをすれば、子どもを追い詰めてしまうだけです。学習指導要領に子どもを合わせるのではなく、子どものための教育をどうつくりあげるかが、もっとも大切にしなければなりません。

教職員組合は、新学習指導要領を押しつけないことを教育行政に求めましょう。そして、同時並行で学校でのとりくみをすすみましょう。

### 単純に行事を削減するのではなく

学校でのとりくみでは、教科指導においては、その学年の子どもたちにとって、本当に大事な中身は何かを考え抜き、それに絞り込んで教えること、教科外活動においては、単純に行事を削減することなく、行事もふくめ、子どもの成長・発達にとって大事な活動にしっかりととりくむことが必要だと考えます。

その立場から、以下、いくつか提案したいと思います。各学校での積極的な検討を心からお願いします。

■ 「戸惑いと不安と恐れの中かに希望を見いだす」 ■ (参考)

## 【内容】

### §1. いつにもまして、子どもとの出会いを大切に—子どもを丸ごと受け止めよう

## § 2. 今こそ教育の専門家としての教師の力の発揮を

- (1) 子どもに心を寄せ、あたたかいまなざしで、子どものケアを
- (2) 教科学習では、大胆に単元を削減し、子どもの学習負担を軽減する
- (3) 教科外活動では安易に行事の削減などはおこなわない
- (4) 学年会や教科部会、生活指導部会、児童会・生徒会担当者会議で縦と横のつながりをつくって

## § 3. 具体的なとりくみ

- (1) 9月から授業再開を想定、受験教科の範囲削減を文科省、都道府県教委へ要望
- (2) 9月再開を想定した計画 [1]小学校 [2]中学・高校の場合

## § 4. 父母・保護者の理解と合意を

## § 5. 教職員の合意づくりを

## § 6. 今こそ、校長先生はリーダーシップを発揮して

## § 7. いわゆる「ネット授業」について

## § 8. おわりに



## § 1. いつにもまして 子どもとの出会いを大切に一子どもを丸ごと受け止めよう

安倍首相による全国一律休校要請によって、子どもも教師も2019年度は学年末にふさわしい締めくくりができない状態におかれました。それに引き続く「緊急事態宣言」によって、2020年度の始まりも、新しい年度の始まりにふさわしい出会いができない状態におかれています。

### 子どもはどんな思いで過ごしているのか

子どもたちはこの長い休みの間、どのように過ごしているのか、どのように過ごしてきたのか、家庭訪問もなかなかできないもとで、実態そのものもなかなか把握できていない状況におかれているのではないのでしょうか。貧困家庭の子どもは、給食もないなかで、ちゃんと食べることができていたのか、ほとんど家の中で過ごしていた子は、大きなフラストレーションをため込んでいたのではないかと、長期にわたる休校で、登校拒否・不登校が増えるのではないかと、など先生方も不安がいっぱいだと思います。

### 「よく来たね」と子どもをまるごと受け止めたい

5月7日(※)に子どもたちと出会えるかどうか、なお不確定要素をもっていますが、こんな状況だからこそ、いつにもまして、子どもたちとの出会いを大切にしたいものです。(※大阪府は5月7、8日も休校と決めたようです 4月27日夕方現在)

「よく学校へ来たね」という思いを全面に、子どもを丸ごと受け止めたい。子どもの表現を全力を込めて受け止めたい。今年だからこそ、こんなときだからこそ「学級びらき」を工夫したいですね。ともすれば、大幅に削減された授業時数のもとで、早く教科の授業を始めなければという気持ちに駆り立てられるのは無理のないことですが、ちょっと立ち止まって、こんなときだからこそ、焦らずに、あわてずに、教室が子どもた

ちの居場所となるように、教師と子どものあたたかい関係を築けるよう、心を砕いてみましょう。そして、子どもたちどうしのあたたかい関係を築けるよう、子どもたちの心と心をつなぐことを大切にしたいですね。

## § 2. 今こそ教育の専門家としての教師の力の発揮を

私たち教員は、「私は教育の専門家だ」といつも意識して教育活動をすすめているわけではありません。急に「専門家としての教師」と言われて、戸惑う先生方もいらっしゃるかもしれません。

### 教師は子どものことを考えて教育活動を計画している

でも、ちょっと考えてみてください。たとえば、先生方が授業を構想するときには、「この単元で一番大切にしなければならないことは何だろう、この文学教材では、子どもたちにこんなことを読み取らせたいな」と子どもの顔を思い浮かべながら、考えているのではありませんか。また、こんな発問をしたら、子どもたちが活発に発言できる授業になるのではないかと考えているのではありませんか。

教科外活動では、運動会で子どもたちが力を合わせてとりくめるには、どんなことが必要だろうか、子どもたちが感動する文化祭をつくりあげたい、子どもたちの笑顔がはじけるお楽しみ会にしたい、などと考えてとりくんでいるはずですよ。

それが、教員の専門性に他なりません。その専門性を発揮して教員は教育活動にとりくんでいるのです。そのことが教員は教育の専門家であることを示しています。こんなときだからこそ、私たちのもつ専門家としての力を大いに発揮しましょう。

では、その力をどのように発揮すればよいのでしょうか。次から考えていきたいと思います。

### (1) 子どもに心を寄せ あたたかいまなざしで 子どものケアを

休校中、子どもたちは、さまざまな過ごし方をしたことでしょう。多くの子どもたちは、友だちにも会えず、いっしょに遊ぶこともできず、仕方がないので、スマホやゲームで寂しさを紛らわせざるをえない毎日だったのではないのでしょうか。父母・保護者のみなさんも、自分自身の仕事の悩みを抱えながらの子どもへの対応で、おそらく疲れておられることと思います。



### 不安の中でも子どもたちは頑張っている

何よりこのコロナ禍で、大人もふくめてですが、「人とかかわること＝危ない」という風潮がつけられていることが大変気になります。何気ない会話をしたり、親しい人と食事をしたりする、普段なら当たり前のことを控えなければならない状況は、大人でさえ追い詰めていくものです。

ましてや子どもの場合、大人以上に寂しいし、怖いし、不安なのだろうと思います。普段なら、何か心配事があったとしても、友だちと遊んだりしていると、その心配が吹っ飛んでいくこともありますが、長い時間家で一人で過ごしていると不安や心配事が増大してしまいます。でも、子どもたちはがんばっているのです。

### 学校再開後は あたたかいまなざしで

子どもが成長・発達するうえで、人に触れ合うこと、そのときに漂う雰囲気や空気感はとても大切なものです。この休校中も、先生方は、そうした子どもたちに思いをはせ、できる限りのとりくみをすすめられたことと思います。

学校が再開されたら、中には「荒れ」る子どもも出てくるかもしれません。登校しぶりの子どもも生まれてくるかもしれません。余裕をもって、子どもを見るのが求められると思います。そして、何よりもあたたかいまなざしを注ぎましょう。それも教師の専門性の重要な部分です。どの子どもも、何らかの形で傷ついているのです。その子どもたちに心を寄せ、しっかりケアし





ていきましょう。

## (2)教科学習では大胆に単元を削減し 子どもの学習負担を軽減する

教科学習では、その学年の子どもたちに本当に身につけさせたい力とは何か、考え抜きましょう。そして教科書を読み、子どもたちに「これだけは」という単元や教材を選びすぎましょう。そうすれば、逆に、これは削除しよう、軽く扱おう、という単元や教材が見えてきます。そういう単元や教材は、思い切って大胆に削減しましょう。



### 次の学年で教えることも視野に

また、次の学年で力を入れて教えてもらおうという単元や教材がでてきます。それは、次の学年でしっかり指導してもらうようにしましょう。6年生の場合は、特に教科としての「外国語」などは、中学でしっかり指導してもらうこととし、小学校では、「英語嫌いをつくらない」を目標にとりくみましょう。

そうして、選りすぐった単元と教材で、今年度の教育計画を組み立ててみましょう。どのような計画になるかは、後に具体的に例示したいと思います。

[→そもそも授業時数の確保が必要では?と思う方はコチラを](#)

## (3)教科外活動では安易に行事の削減などはおこなわない

子どもたちは、教科教育だけでなく、教科外の活動をとおしても大きく成長します。たとえば、運動会や遠足などの学校行事をとおして、全力をあげることの大切さや、力を合わせるものの大切さ、自分たちで考えるものの大切さなどを、実際のとりくみをとおして学びます。一つの行事を終えたら、子どもたちが見違えるように成長した姿を見せたという経験は、多くの先生方ももっておられると思います。

### 行事等は「総合」に位置づける

だから、「授業時数確保」などという口実で、学校行事などを「初めに削減ありき」としないことが大切です。

まずは、学校で大切にしてきた自治活動、自主的活動、学校行事を選びすぎましょう。それを特別活動はもとより「総合的な学習の時間」に位置付けること、教科との関連を持たせることもふくめて、どのように時間をつくりだすかについて、知恵を絞りましょう。

「総合的な学習の時間」について、学習指導要領では、「指導計画の作成と内容の取扱い」で、「教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習を行う」あるいは「他者と協働して課題を解決しようとする学習活動」「グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態」などと述べられています。これを活用すれば、教科外活動を「総合的な学習の時間」に位置付けてすすめることが可能です。大いに工夫したいものです。



## (4)学年会や教科部会 生活指導部会 児童会・生徒会担当者会議で縦と横のつながりをつくって

今述べてきたことを、まず一人で考えることも大切です。でも一人だけよりも、まわりの先生方といっしょにとりくめたら、もっといいですね。ですから、上述したことを学年教師集団でとりくんでみましょう。

### 学習指導要領通りでは子どもも先生もパンク

ただでさえ、新学習指導要領は究極の詰め込みとなっているのに、そのうえ、削減された授業時数を何の工夫もせずに指導書に書いてある時間通りそのまま上乘せなどとすると、子どもの学習負担は極限を超え、先生方の働き方も極限を超え、子どもも先生方もパンクしてしまうことは、だれが考えてもはっきりしているのではないのでしょうか。

だからこそ、学年会で「子どもにとって大事なことを絞り込んで教えましょう」と話し合えば、一致点が見いだせるのではないのでしょうか。これができれば、しっかりとした横の連携をつくることができます。

### 教科部会で縦の連携 学校運営組織をフル活用

また、教科部会で話し合うことも大切になってきます。たとえば、算数では、新学習指導要領では2年生で3分の1を教えることになっていますが、そもそも無理な話です。だから、それは、2年生ではなく3年生で教えましょう、また、割合も4年生から出てきますが、それは5年生でしっかりやりましょう、ということになれば、縦の連携をつくることができることになります。

教科外学習については、子どもたちの成長をはかることのできる教育活動について、生活指導部会や児童会・生徒会担当者会議などで教師集団として考えることができると思います。

このように、学校運営組織をフルに使って、教育課程づくりにとりくむことが必要なのではないのでしょうか。



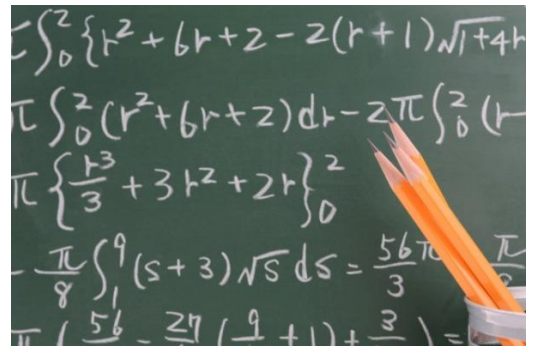
## § 3. 具体的なとりくみ

### (1) 9月から授業再開を想定

#### 受験教科の範囲削減を文科省・都道府県教委へ要望

ここでは、学校再開を9月と想定し、2月末までの授業計画を提案します。また高3、中3については、今年度学習する内容から大学入試、高校入試など試験範囲の縮小削減を文科省・都道府県教委へ進言することことを提案します。この想定理由や条件は次の通りです。

①【授業計画】武漢の都市封鎖解除まで2ヶ月半かかったことを例に、日本もそのようになる可能性も想定したこと。例えば緊急事態宣言が3ヶ月近く続くと7月に入ることや2度目の流行も考えられることから、9月に学校再開とした計画を策定し、それに備えることで、緊急事態が延長されるたびに計画の練り直しを避ける意味があること(9月入学・新学期制となれば別ですが)。解除が早まれば、それに併せて授業を増やせばよいということです。



②【大学入試・高校入試】今年の高校3年生、中学3年生の多くは来年に上級学校への受験を控えています。各校長会や進路指導協議会が中心となって、文科省、都道府県教委へ受験教科(それ以外の教科も)に対する教科書の試験範囲の削減を具体的に申し入れること。例えば、数学では中学3年生は後半で学習する円の性質、三平方の定理、標本調査(統計分野)の削減、高等学校数学Ⅲでは試験範囲を微分法までにし、積分法以降は試験範囲から外すことなど。

③【各学校で今年度の教育課程を作成】今、子どもたちの学習遅延、授業再開が大きな話題になっていますが、何よりも気にならなくてはならないのは、子どもたちの健康であり、私たちが含めての「命の大切さ」です。その意味で、学校再開後、授業の前にすべきことはたくさんあります。体を動かしたり、レクリエ

ーションなどを通して子どもたちのストレスを和らげること、4月に行われなかった様々な健康診断の実施なども含まれます。授業以前にすべきことを出し合い、その上で授業計画と教科外（行事など）活動計画を立てていくことが必要です。

高3、中3の受験に関わる教科の範囲が削減されるのであれば、他の学年も同様です。削減内容がわかれば、それに併せて授業計画を作成します。また、各学校で教科書の配列にとらわれず、優先順位を決めていきます。休校措置期間の長さにあわせて優先順位の高いものから授業ができるように計画を立てます。内容によっては、次学年以降に回す項目も考えましょう。

## (2)9月再開を想定した計画

9月～2月末まで23週あります。単純計算では、以下の通りの時間になります。

9月～2月（23週）の授業時数			
週あたり時数	標準時数	9月～2月	教科
週1時間	35時間	23時間	中=音美23, 技家12
週2時間	70時間	46時間	小=社3, 外56 高=現代文Aなど
週3時間	105時間	69時間	小=社6, 理4～6, 体1～4 中=国3, 社12, 理1, 数2, 体
週4時間	140時間	92時間	中=国12, 社3, 数13, 理23, 英 高=国総, 古典B, 世史B, 日史B, 地理B, 数Ⅱ, 物理, 化学, 地学, コミュ英ⅡⅢ, 家庭総合など
週5時間	175時間	115時間	小=国56, 算2～6 高=数Ⅲ
週7時間	245時間	161時間	小=国34 高=体
週9時間	315時間	207時間	小=国12 ※1年は標準306

授業の軽重は細かくみる必要がありますが、大まかには下記の通りです。

教科	学年	標準時数 A	指導書の 標準時数	提案時数 B	割合(%) B/A
国語	小学4年	245	197	95	38.8
	小学5年	175	145	99	56.6
算数	小学4年	175	138	99	56.6
数学	中学1年	140	128	74	52.9
	中学2年	105	94	66	62.9
	中学3年	140	116	81	57.9
理科	中学1年	105	95	68	64.8
	中学2年	140	119	89	63.6
	中学3年	140	116	82	58.6
高校数学	数学Ⅲ	175	144	110	62.9



## [1] 小学校の場合

すべての教科を例示することはできませんが、例えば国語（光村図書参照）、算数（啓林館参照）の場合をみてみます。（PDF ファイル）



①【国語】優れた文学作品や説明文，詩を重点にしっかり教えることが大切だと思います。作品を手段として言語活動につなげるものについては，大胆に削減しましょう。削減した単元の中には「書くこと」が多く含まれていますが，それは，説明文指導をとおして認識と表現の力を身につけることができます。また，日常の作文指導で補うことが可能です。漢字では，4年生で都道府県を漢字で書くということが新たに出てきていますが，それは，社会科の指導の中で学ぶこととします。

【小学4年国語】95時間 ■[小学4年国語授業計画](#)■

【小学5年国語】99時間 ■[小学5年国語授業計画](#)■

②【算数】4年生の算数では，1けたでわるわり算，2けたでわるわり算と少数のかけ算，わり算を重点に指導します。また，角の大きさと垂直・平行を連続して指導し，面積と直方体・立方体を連続して指導することで，系統的な指導が可能となり，授業時数の削減が可能となります。

【小学4年算数】99時間 ■[小学4年算数授業計画](#)■

## [2] 中学・高校の場合

①【中学3年数学】81時間 【高等学校数学Ⅲ】110時間（標準時数175時間 微分法の応用も含むと90時間）

高3とともに中学3年生はそのほとんどが受験を控えています。

【中3】後半で学習する円の性質，三平方の定理，標本調査（統計分野）を削減します。高校でも学び直しとあわせ，教科書で触れることが多いので，学習を高校で行います。三平方の定理は高校数学Ⅰの図形の軽量・三角比で，円周角の定理は数学Ⅰの図形の性質でそのまま扱えるので，補習は不必要。ただ，円周角の定理や三平方の定理は，中学数学のメインともいえる単元なので，時間が増えるようであれば，基本的内容だけでも触れるようにはしたい。

【高3】高等学校数学Ⅲでは積分法まで学習すれば，微積分の醍醐味が実感できますが，大学入試の範囲を微分法までにし，積分法以降は試験範囲から削減（大学で履修）するなど。12月までに終わらせようとするので，「微分法の応用」まで終了するのはむずかしいかもしれません。

■[中学3年数学授業計画](#)■

■[高等学校 数学Ⅲ授業計画](#)■

②【中学2年数学】66時間

文字式の計算は，連立方程式で扱う範囲を連立方程式を学習する中で扱う。

確率は様々な実験ができる楽しい単元ですが，時間がなければ3年生で扱う。

## ■[中学2年数学授業計画](#)■

### ③【中学1年数学】74時間

入学して（入学式も行えなかった学校も）すぐに緊急事態宣言となり，中学校の生活への実感が伴っていない学年です。小学校の卒業式も含めて。そのため，一層ていねいな指導が必要です。前半は正の数・負の数，1次方程式に力点をあてる。標準時数よりもたっぷり時間をかけたい。

変化と対応（関数）は2年次の1次関数の分野で扱う。

## ■[中学1年数学授業計画](#)■

### ④【中学理科】1年＝68時間 2年＝89時間 3年＝85時間

STFなんて言ってもらえないのでその辺を削り，環境を削り，作成しています。9月始まりでの時数なので，それ以前ならより余裕を持って取り組めることが期待できます。

## ■[中学理科授業計画](#)■

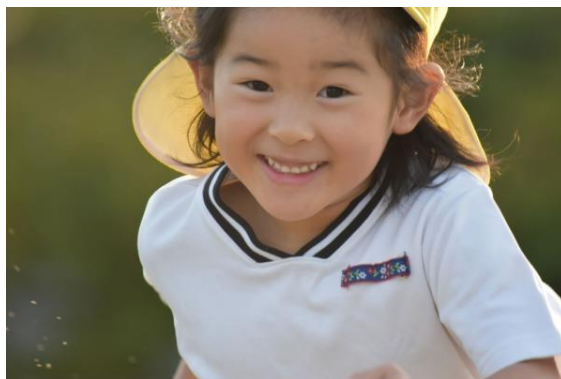


## §4. 父母・保護者の理解と合意を

上に述べたとりくみをすすめるうえで，もっとも重視したいのは父母・保護者の理解を得，合意をつくってとりくむことです。学校に来られない日がかなり長期にわたっているので，父母・保護者のみなさんも，「これだけ授業時間が少なくなってしまって，うちの子の勉強は大丈夫かしら？」と大きな不安を持っておられることと思います。

まずは，その不安を正面から受け止めましょう。そのうえで，「心配ないですよ。学校では本当に大事なことを選りすぐって子どもたちに教えることにしています。大事なことはしっかり時間をかけます。でも，次の学年や中学校で教えられることは，そこでしっかり教えてもらうようにしました。安心してください」と伝えれば，きっと理解してもらえ，納得してもらえらると思います。

教師が教育の専門家として知恵を絞り計画を立てたことに反対する父母・保護者はいないと思います。父母・保護者を思い切って信頼しましょう。同時に，そうした教育課程づくりで父母・保護者との信頼関係を築くことができます。そうなれば，父母・保護者とともにつくる学校へと大きく前進させることができるのではないのでしょうか。



## §5. 教職員の合意づくりを

これまで述べてきたとりくみをすすめれば，長期休業の縮減や土曜授業の実施，7時間目などをやらなくても，子どもに力をつけることができます。子どもに過重な学習負担を負わずに，気持ちよく学習にとりくむ条件をつくることができます。それらについて教職員の合意をつくることできれば，学校全体の意思として教育課程をつくるということになります。

しかも，教職員に過重な労働を強いることなくすすめることができます。教員の働き方改革にもつなげることによって，校長との合意をつくるのではないのでしょうか。校長もふくめて全教職員の合意をつくることは，真剣にとりくむことによって，必ず可能であると考えます。

## §6. 今こそ，校長先生はリーダーシップを発揮して



上記のとりのくみをすすめるうえで、校長先生がリーダーシップをとることはとても大切です。今年ばかりは、教育委員会のいいなりになっていたら、本当に子どもは守れません。まだどうなるかわかりませんが、仮に文部科学省や教育委員会が、これだけ長期の休みによって授業時数が削減されているにもかかわらず、「新学習指導要領どおりの授業時数で授業をおこなえ」と押しつけてきたとしたら、校長もふくめて、「それはいくら何でも無茶な話」「子どもを苦しめ、追い詰めることになる」「それこそが無理難題！」という声があがることは明らかではないでしょうか。

本来校長先生は、学校の代表者であって、教育委員会の出先機関ではありません。こんなときだからこそ、校長先生がリーダーシップを発揮することが求められます。

教職員みんなで、校長先生を盛り立てて、教職員の共同の力で教育活動がすすめられるようにしましょう。



## § 7. いわゆる「ネット授業」について

大阪でもいくつかの自治体が、いわゆる「ネット授業」を配信しています。現在学校は休業中であり、「ネット授業」は、せいぜい、家庭学習の補助程度のものであります。ですから、そもそも「授業」というネーミングそのものが誤りです。授業は、学校の教育課程に位置付けられた教科学習の意味で使われる言葉であり、家庭学習の補助に使用すべき言葉ではありません。このネーミングは、あたかもそれが「授業」であるかのように思い込ませて、学校が再開されたあとも、こうした「個別最適化された学び」を教師の専門性を踏みにじってすすめようとする意図をふくんだものであり、警戒する必要があります。

### 授業は教師と子どもたちとの双方向・対話的關係でつくりあげるもの

しかも、すでに述べたように、安倍首相による全国一律休校要請によって、異常な2019年度末を迎え、さらには、緊急事態宣言によって、新年度の担任やクラスもわからない状態にある子どもたちに対し、自分の担任の子ども顔や名前もわからない教師が、ネットで「授業」をするなど、あってはならないことです。

授業は、教授＝学習過程であり、教師と子どもたちとの双方向・対話的關係※でつくりあげるものです。したがって、そもそもオンラインでの一方的關係で成立するものではありません。

そのうえ、教育行政が特定の形態の授業を教師に押しつけることは、「教諭は児童の教育をつかさどる」とされている学校教育法に明確に違反するものであり、こうした押しつけは断じて許されません。

※授業は、教師の教授活動、生徒の学習活動、教材の3つの基本的成分から構成される。授業は、これら3者の相互關係のなかで進行する動的過程であり、そこにはいくつかの側面がふくまれている。

授業過程は、一面からみれば、文化遺産の伝達である。しかし、より内面的にとらえれば、授業は、文化財の習得をとおして生徒の諸能力が発達していく過程であり、教材を媒介とする教師の働きかけ(発問とか教示)や生徒相互の影響のもとで生徒が自己発達をとげていく過程である。また、これを教師の側からみれば、文化遺産である教材を使って子どものなかにある可能性を引き出し発展させる過程ということが出来る…授業は教育実践の中心をなすものであり、教育研究のすべての出発点であると同時にゴールでもあるということが出来る。(『現代教育学の基礎知識』1979年 有斐閣ブックス)

## § 8. おわりに

子どもに会いたい！と切望しておられると思います。いまの事態は、あらためて学校や教職員がどのような役割を果たすべきかを問いかけているのではないのでしょうか。子どもに会いたい！という心からの願いは、「学校は、子どもにとって、安心の居場所」であり、「子どもと教師がいっしょに生きる場所」であり、「子どもが教師といっしょに、教師が子どもといっしょに成長しあう場所」であることを示していると思います。

だからこそ、授業が遅れているからといって、学習指導要領が示す標準授業時数に照らし合わせて機械的に不足する数字をあてはめ、夏休みをなくすだの、土曜授業をするだのという議論に与してはならないのではないのでしょうか。



大切なのは 子どもを全力で受けとめること

いま、もっとも大切なのは、子どもを全力で受け止めることです。そして、子どもといっしょに成長できる新しい学校をつくりあげるつもりで、一つひとつの教育活動をつくりあげることだと思います。いまの事態を、学校を未来に向けて再生する契機に、未来に向けて希望ある学校をつくる契機にしていくことが切に望まれます。この提言が、そのとりくみに少しでも役に立つことができれば、これほどうれしいことはありません。ぜひ、ご検討ください。

大阪教育文化センター事務局

投稿者 [osaka-kyoubun-web](https://osaka-kyoubun-web.com) 投稿日: [2020年4月27日](#) カテゴリー [提言・見解](#)